

令和 8（2026）年度関西医科大学大学院看護学研究科

博士前期課程

入学試験問題 冬期

専門科目（慢性疾患看護学）

問題 1 以下の慢性疾患のある事例への看護について、要点を述べなさい。

- 1) A さん、32 歳女性。2 型糖尿病の父と母との 3 人暮らし。会社の健康診断で HbA1c12%と上昇し、血糖コントロール目的で総合病院に入院となった。身長 162cm、体重 88.2kg、糖尿病食 1600kcal/日及び薬物療法としてルムジェブ（2-2-2）、ゾルトファイ 10 ドーズ（10 単位/0.36mg）が開始された。入院 3 日目、検査結果から内因性インスリンが認められるため、ゾルトファイを中止し、メトホルミン 500 mg/日とビクトーザ 0.6mg/日が開始された。
- 2) B さん、54 歳女性。自宅に併設された夫の建築事務所の経理と家事全般を担当している。子ども 2 人（長男 28 歳、長女 26 歳）は同居しているが、仕事が忙しく帰りが遅いため、家事の分担はしてもらっていない。手足の関節痛と熱感が続いたため、近所の整形外科を受診したところ、関節リウマチと診断され、非ステロイド性の消炎鎮痛薬と抗リウマチ薬メトトレキサート（MTX）の内服治療が開始された。
- 3) C さん、65 歳男性。脳梗塞再発。10 年前に初発脳梗塞を発症。無職で年金暮らし。2 階建ての一軒家で持ち家。介護保険の申請はしていない。急性期病院で治療を終え、発症から 3 週間目に回復期リハビリテーション病棟に転院した。入院時、両上肢の振戦、左片麻痺、高次脳機能障害（左半側空間無視、病識認知の障害、注意障害）があった。妻は遠方にいる実母の介護のために別居生活中で子どもはおらず、親族からの支援は得られにくい状況である。

問題 2 以下の用語を用いて慢性疾患看護について、説明しなさい。

- 1) セルフマネジメント
- 2) 外来看護

令和 8 年度（2026） 関西医科大学大学院看護学研究科
博士前期課程 入学試験問題 冬期 専門科目（慢性疾患看護学）
出題の意図および解答例

問題 1

1)

【出題の意図】

2 型糖尿病の臨床所見と検査所見、青年期女性のライフイベント、ならびに食事療法、薬物療法と減量ふまえた看護の知識を評価する。

【解答例】

2 型糖尿病の初期には無症状のことが多いが、進行すると口渇、多尿、体重減少などの臨床所見が現れる。検査では、空腹時血糖値：126 mg/dL 以上、75gGTT200mg/dl 以上、随時血糖値 200mg/dl のいずれかに加えて HbA1c 6.5%以上で診断される。Aさんは青年期女性であることから、妊娠・出産などのライフイベントを念頭に、薬効の注意点をふまえた血糖コントロールを目指した食事療法、薬物療法と減量の必要性、合併症精査のための定期的な検査と通院の必要性を伝え、治療中断に至らない看護が望まれる。

2)

【出題の意図】

関節リウマチの臨床所見と検査所見、薬物療法（消炎鎮痛薬、抗リウマチ薬メトトレキサート）による症状コントロール、経理の仕事と家事全般のバランスを考慮した看護の知識を評価する。

【解答例】

関節リウマチの臨床所見は、両手の指や手首などの関節に「朝のこわばり」や「左右対称の腫れ・痛み」が起きるのが特徴である。検査所見では、血液中の炎症反応や自己抗体（リウマトイド因子、抗 CCP 抗体）の上昇、レントゲンでの骨変化で評価される。Bさんは夫の建築事務所の経理の仕事と家事全般を担当していることから、関節に過度な負担をかけて病状悪化につながらないように、家事分担など家族のサポートを考慮した看護が望まれる。

3)

【出題の意図】

脳梗塞の臨床所見と検査所見、親族からの支援が得にくい状況での社会資源の活用、健やかな老年期へと移行できる向老期を考慮した看護の知識を評価する。

【解答例】

脳梗塞の臨床所見は、片麻痺、しびれ、ろれつが回らないなどの言語障害、めまいや視野の異常が突然現れる。検査所見は、発症早期から高信号を示す頭部 MRI の拡散強調画像（DWI）や、出血除外のための頭部 CT、原因検索のための頸動脈・心臓超音波検査が行われる。後遺症の主な特徴として、運動機能障害、感覚障害、高次機能障害、排泄障害、情動・性格変化などがあり、患者本人の自立を妨げるだけでなく、家族の生活にも大きな影響を与える。Cさんが回復期リハビリテーション病棟から自宅退院を目指すならば、社会資源の活用と健やかな老後へと移行できる向老期を考慮した看護が望まれる。

問題 2

1)

【出題の意図】

慢性疾患看護に主要なセルフマネジメントについての知識を評価する。

【解答例】

セルフマネジメントは、慢性疾患のある人が自らの病状や治療を理解し、日常生活の中で症状をコントロールしながら健康を維持・向上させる行動を指す。「治療（医療行動）のマネジメント」「社会生活（役割）のマネジメント」「感情のマネジメント」という3つの重要な課題に向けて、慢性疾患患者が現状の課題や困りごとを患者自身が認識できるように促す。実現可能な小さなゴールから始め、成功体験を積み、「自分ならできる」という自己効力感の向上をはかり、行動の継続を支える。医療者の指示を一方的に押し付けるのではなく、患者の価値観や生活背景に寄り添う伴走者としての関わりが支援のポイントである。

2)

【出題の意図】

慢性疾患看護の拠点ともいえる外来看護についての知識を評価する。

【解答例】

外来看護には、糖尿病や心不全などの長期的な経過をたどる慢性疾患が、自宅で自分らしく安全に生活できるように、限られた受診時間の中で生活習慣や療養上の困りごとを把握し、悪化予防や自己管理を支える重要な役割を担う。外来看護の主な役割は、食事や運動、服薬などの管理状況を確認し、無理のない生活調整と一緒に考える自己管理支援、悪化のサイン（体重増加、むくみ、息切れなど）を早期に発見し、重症化を防ぐ症状のモニタリング、医師には話しにくい日常生活の不安や悩みを受け止め、精神的な支えとなる療養相談対応、薬剤師や栄養士、地域の福祉サービスなどと繋ぎ、継続的な生活を支える多職種・社会資源

の連携などがある。